

## 27. 食道アカラシアの X 線分類

(アカラシア小委員の規定にたる)

原田 康行 (千大)

アカラシアの X 線分類に関するアカラシア小委員会の試案によれば, 食道 X 線像の形態を X 線拡張型として紡錘型, フラスコ型, S 状型の 3 型に分け, さらに拡張の程度を拡張度として最大横径 3.5 cm 未満を I 度, 3.5 cm 以上 6.0 cm 未満を II 度, 6.0 cm 以上を III 度とする拡張型と拡張度の 2 要素を別個に扱う分類を行なっている。当教室で従来より行なわれてきたアカラシアの X 線分類と比較するため, アカラシア 100 症例と正常食道 100 例を対象として若干の検討を加えた。アカラシア症例中, 従来の方法による分類が不可能であった症例は 47 例あり, このうち 31 例は紡錘型に属するものであった。正常食道拡張度の検討では最大横径 2.5 cm 以上のものが 86 例あり最高は 4.2 cm であった。一方紡錘型の症例中には最大横径が 2.5 cm に達しない症例が 6 例もあり, したがって最大横径が 4.5 cm 以下の場合, 拡張度は X 線上特長的所見でなく, 下部食道噴門部の狭窄像が特長的所見となる。

## 28. 食道 Achalasia の病変進行症例について

下鳥 隆生 (千大)

本症の非手術患者 30 例を対象として, X 線学的に病変の変化を経時的に追求した。教室分類による X 線型が変化した症例は, I 型→II 型が 7 例, II 型→III 型が 2 例, I 型→II 型→III 型と変化した稀有な症例が 1 例, 計 10 例であり, 食道最大横径が増大した症例は 15 例であり, さらに食道軸は 7 例, 食道壁緊張度は 15 例, 食道運動は 12 例, 食道炎の状態は 14 例に変化が認められた。病変進行判定の主要基準は X 線型の変化および食道最大横径の増大 (1 cm 以上増大し, 増大率 20% 以上) であり, 他はこれに随伴する二次的所見であった。この基準による病変進行症例は 30 例中 15 例 50% の高率であり, 対象を最終検索時病期期間により 3 群に分けると, 病変進行症例は, 病期期間 5 年以下の群では 8 例中 3 例, 37.5%, 病期期間 5~10 年以上の群では 11 例中 5 例 45.4%, 病期期間 10 年以上の群では 11 例中 7 例 63.6% であり, 病期期間の長い群ほど病変進行症例が多くなる。

## 29. 早期胃癌原発巣における血管の態度

長尾 孝一 (千大・病理)

癌が血管壁を崩壊し, 血管内に癌細胞塊として侵入することが血行性転移を起す 1 つの根拠と考えられる。これに反し, 血行性転移をあまり起さない場合の癌組織内

における血管の態度はどのようになっているかを知るために, 早期胃癌の内, 5 年以上生存例の胃癌原発巣を検索した。ことに, この場合, 問題になるのは, 静脈, とくに小静脈なので, これを中心に観察すると癌組織は血管外膜細胞までは変性崩壊しているが, 静脈は癌巣によって圧迫され, 血流はゆるやかになり, 逆に内皮細胞は増殖している。また, ある部分では癌組織によって圧迫され完全に血管は閉塞し, その閉塞した血管を癌組織が崩壊している像をみとめる。このような癌は増殖のゆっくりな INF  $\alpha$ ,  $\beta$  型の癌に多くみられる。すなわち以上の癌組織内における血管の態度は癌の血行性転移を起さない場合の 1 つの病理組織学的根拠となり得ると考えられる。

## 30. 針刺麻酔に関する文献的ならびに基礎的研究

山下 泰徳 (千大)

1958 年以来, 中国で発達しつつあるといわれている針刺麻酔 (針麻酔) について, その沿革, 種類, 適応, 薬物麻酔との比較, および, 日本における針麻酔手術の現況等について, 文献的に考察した。

また自験例として, 専門の針師が各種の穴位に針刺したものに, 和製の電気刺激発生装置を用いて, 直流棘波の電気刺激を与えた臨床例について, 皮膚の知覚の変化を検討した。すなわち, 3 cps, 10~15 V, 1~3 時間の通電で, 中渚, 気舎, 百合, 陥谷, 合谷, 内関, 手三里, 三陰交, などの中, 2 つないし 3 つの組合せに通電した 7 症例中, 右中渚と右三陰交の組合せで, 右足脊に知覚屯麻を見, また気舎相互の組合せで, 右手掌に一過性の知覚屯麻を見たが, 他の 5 例には皮膚知覚の変化は見られなかった。なおこの研究について, 千葉大学医学部東洋医学研究会の協力を得た。

## 31. 当院における外科診療の実態ならびに興味ある一症例

飯野 正敏, 小野沢君夫, 神谷 定茂  
(国立佐倉)

最近 1 年間の新来患者総数は 2,238 例で, 入院患者数は, 684 例, その中 221 例 (32%) が手術例であった。内訳をみると, 重症例, および緊急手術例が多く, 疾患別では外傷が多いが, 消化器疾患は漸時増加してきている。

つぎに, 報告症例は, 68 手の女性, 吐血を主訴として来院。レントゲン検査では, 食道胃接合部が胸腔内に脱出し, 食道下部に癒着化とニッシュを認め, 食道鏡検査では, 上門歯列から 25 cm の後壁に縦走する線状のビラ